

特112

165

蝦夷天狗研究

卷二第

天狗徒研究會發行

~~271~~
~~119~~

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



會員諸賢に告白す

空拳飄然北海の仙島を踏破すること茲に
 三回焉。幸哉篤志諸君の同情に依り。本
 誌第二卷の上梓を見るの幸榮を得たり。
 今や第四回の探検を断行せんとす。希ふ
 本會の舉を賛して。参考品の提供。會員の
 勧誘に一臂の勞を分たれんことを。探検
 途次必ず歴訪せん。乞ふ面晤あらんこと
 を。

諒闇中年始の禮を欽く

佐々木船山

舌代

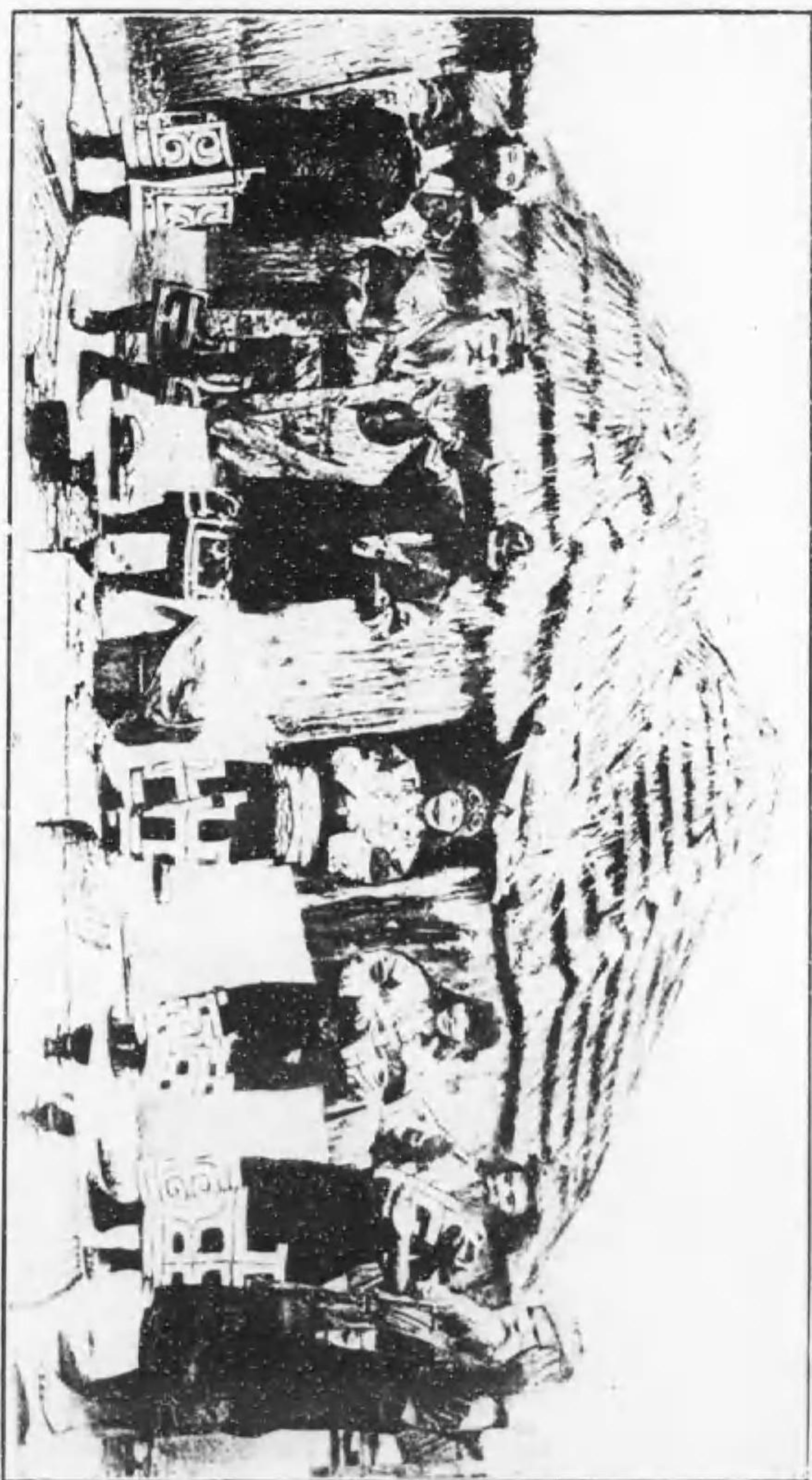
著者固より赤貧洗ふ如く、加ふるに
 住するに常宅を有せず、一枝の管城
 を握つて東泊西漂恒なし、本稿の如
 きは食前食後、若しくは燈火豆の如
 き寒窓に於て草する所なれば、文章
 の錯亂思想の誤謬は深く以て會員
 諸君に謝する所なり。

會告

△平賀鳩溪自筆寫本

蝦夷松前焉。全五卷。

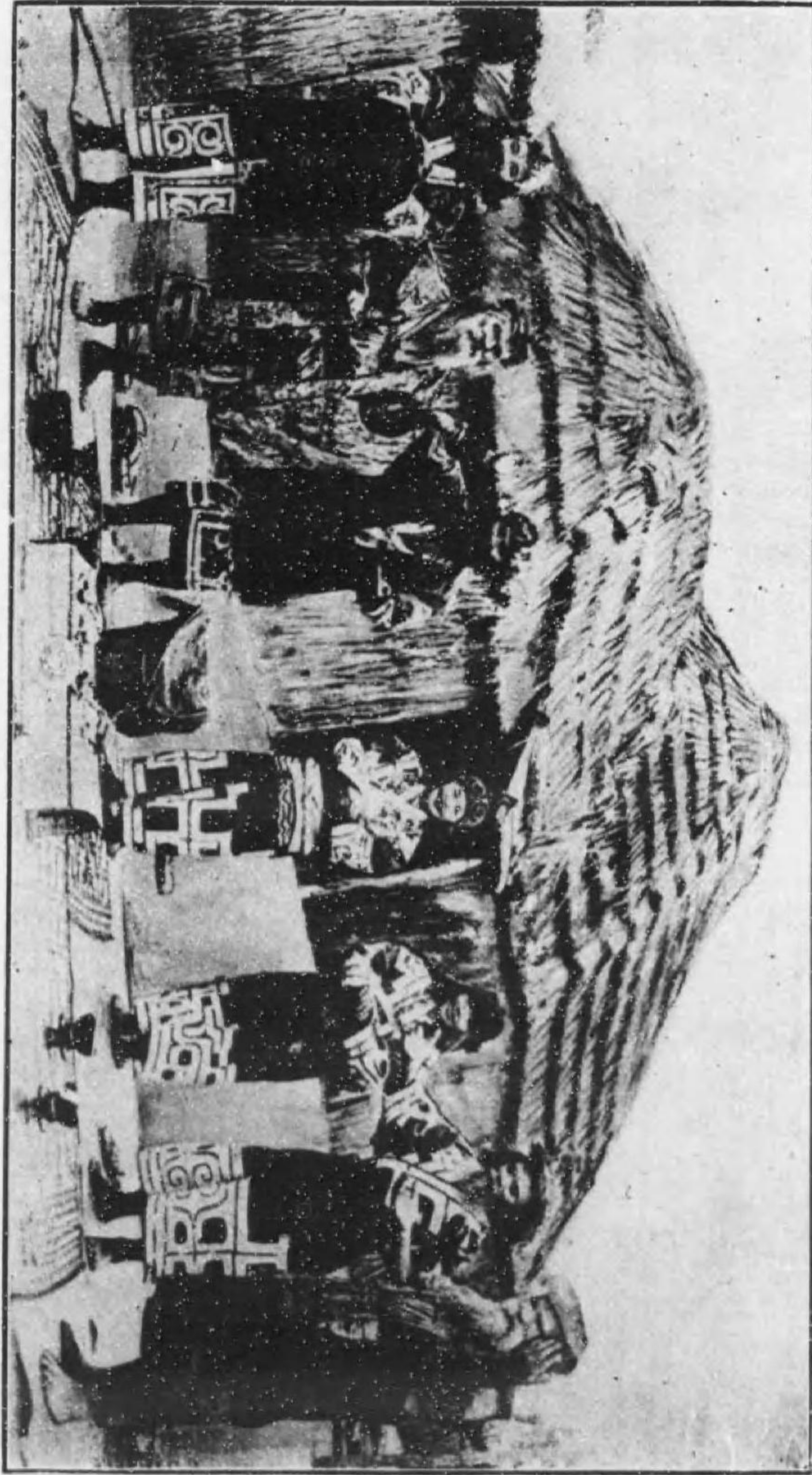
右次卷より連載す稀有なる珍籍なり



(寄店向中開寄)

踊歌のマイア

112
165



(寄店商井中蘭室)

踊歌のナイア

會員諸賢に告白す

空拳飄然北海の仙島を踏破すること茲に
三回焉。幸哉篤志諸君の同情に依り。本
誌第二卷の上梓を見るの幸榮を得たり。
今や第四回の探検を断行せんとす。希ふ
本會の舉を賛して。参考品の提供。會員の
勸誘に一臂の勞を分たれんことを。探検
途次必ず歴訪せん。乞ふ面晤あらんこと
を。

諒闇中年始の禮を飲く

佐々木船山

舌代

著者固より赤貧洗ふ如く、加ふるに
住するに常宅を有せず、一枝の管城
を握つて東泊西漂恒なし、本稿の如
きは食前食後、若しくは燈火豆の如
き寒窓に於て草する所なれば、文章
の錯亂思想の誤謬は深く以て會員
諸君に謝する所なり。

會告

△平賀鳩溪自筆寫本

蝦夷松前焉 全五卷

右次巻より連載す稀有なる珍籍なり



山江大言狂舞樂

蝦夷天狗研究

第二卷

目次

贅語	四
河伯、憑夷、阿無夷、アイヌ、娥眉と創世記の「アタム」と	六
愛宕神社	六
竪穴考(一)	六
石器供養の墳墓	一四
古代アイヌの火星探検	二一
アイヌのユウカル「ウエタ」と信濃國上田	二三
平親王將門と大江山酒吞童子	二六
不思議なるアイヌの卜占實驗	三〇

大正
2. 3. 14
内交

タンクトと象形文字……………三三

天狗に魅まるゝ辯……………三四

アイヌの演劇……………三七

釧路國トウロのアイヌ……………四一

アイヌの議論……………四五

千島エトロウ島土人風習……………四六

誌外雜錄

本誌第一卷各地新聞紙の批評……………四九

樋口銅牛氏の書翰……………五〇

會則……………

廣告……………

目次終

蝦夷天狗研究

第二卷

佐々木船山著

贅言

史を繕て案ずるに。我が神州には天孫人種以前に一太古人種あり。大概之を蝦夷と稱せしは典籍の特筆する所なり。神武帝東征頃の事蹟は確たる記録の據て以て徴するに足るものなく。降て景行帝御宇に至り武内宿禰の東國に赴きし一節に於て始めて蝦夷の稱見え。日本書紀に左の註あり。

齊明帝の朝。小錦下坂合部石布連。大山下津守吉祥連等二船。奉使吳唐之路。以己未年七月二日。發自難波三津之浦。八月十一日發自筑紫大津之浦。(中略)天子問曰。蝦夷幾種。使人謹答。類有三種。遠者名都加留。次者名麤蝦夷。近者名熟蝦夷。今此熟蝦夷。每歲入貢本國之朝。

之等に徴する時は。現今の常陸磐城一帯の地を熟蝦夷と言ひ。陸前陸中一帯を麤蝦夷と稱し。陸奥の一端を尤も遠き者と爲せしに似たり。更に同紀に註して曰く。

天子問曰。其國有五穀。使人謹答。無之。食肉存活。天子問曰。國有屋舍。使人謹答曰。無之。深山之中。止住樹根。天子重曰。朕見蝦夷身面之異。極理奇怪。(中略)於是蝦夷。以白鹿皮弓三箭八十獻于天子。

噫。古史の記する所如斯。齊明帝御宇に於ける東山北陸。諸道以北の土人は。五穀耕作の道を解せず。純ら漁獵を以て存活せしを知るに足れり。且同紀に蝦夷は大毛人なりと註せるを以て之を推すに。當時の土人は毛深き巨人にて。猶今日の北海道の土人と均しかりしを知るべし。若し夫れ言語上より之を考ふるに。支那の蒼顔を以て「タンクト」なりと言へば。我が朝の蘇我氏は「ソウカツ」に音韻相近きを以て。均しく「タンクト」なりと稱すに足れり。然れば古乘に現はれし「ツチクモ」は「ソクモ」氏にして。「ヤクモ」は所謂「ヤクモ」氏なるなからんや。今内地の地名を見るに。十中八九は總て「アイヌ」語の混血辭なり。

本邦古來不可解の神名頗る多し矣。就中古史上に著名なる所の。猿田彦大神。若しくは。一言主神。其他の天狗と稱する一派の神は。疑ふ所なき此「タンクト」即ち婆羅門(梵天)なるべく。之を稱して天狗と言へるは。從來其意を解するに苦しみたる所なりとす。然るに今や幸にして此天狗と云へるは。世界初初の人類にて。此地球の創造者とも云ふ可き。貴き歴史を有する所の。婆羅門の一派なることを知るを得るに至れり。

抑々此婆羅門は一に梵天と稱し。一派の禁法として事細大となく。言論行事を一切紙筆に記することを許さず。故に其事蹟は之を知る能はずと雖ども。幸にして吠陀經の存するありて。聊か其一端を窺ふことを得るに過ぎず。然るに茲に不可思議なるは。我が北海道士人「アイヌ」の風俗習慣が。此四圍陀に一致せる所あるのみならず。

世界初初の諸の儀式を傳へ居ることを確信して疑はざるものなり。茲に斯會を設け以て此湮滅に瀕せる珍人類の研究を企て。本誌を刊行して世の同好の士に訊ふ所あらんとす。乞ふ名を賣り奇を弄する徒と同一視する勿れ。

河伯、憑夷、阿無夷、アイヌ、娥眉と創世記の「アタム」と日本の愛宕神社

支那の憑夷^{アイヌ}は阿無夷^{アイヌ}にて。此阿無夷は即ち河伯^{カヒ}である。而して阿無夷が一轉して「アイヌ」となり。更にムが落ちて「アイヌ」となりしものが。即ち我が北海道土人の稱呼となりしものであらう。

予曾て謂へらく「アイヌ」は「ワイヌ」の一轉せしものならんと。并は現今にても朝鮮支那人は陰にて我日本人を貶稱して「ワイヌ」と云へり。邦人之を聞き知り轉じて北海道士人を貶稱せしに始まれる語ならんと。有名なる荻生徂萊の如きすら自から日本夷人など署名せしことがある。彼の「倭奴王」金印も恐らく此「ワイヌ」王と讀みしものであらう。と斯如に考へ居たりき。

然る所が「アイヌ」を「タンクト」即ち天狗人種と假定せし以來。専ら此天狗にて有名なる山川或は書籍上に現はれたる所の北海道士人に關係ある記事などを總合して研究せしに。此「アイヌ」なる稱は決して貶稱でなく。支那の河伯即ち阿無夷

の一轉せるものならんとの考を生じたり。

果せる哉北海道士人は支那河伯とは秦以前より已に盛に往來なし居たることを知るを得たり。此に於てか我が研究藩籬を擴大して。支那大陸にまで城砦を築かざるべからざるに至りたり。

支那の娥眉山^{カヒ}は此「カヒ」即ち河伯と同名異字なるべく。此娥眉山には處々の道路の傍に幾多の鼻高天狗の木像が立ち並て居ることは遍く人の知る所である。而して又北海道の「アイヌ」を蝦夷と書して「カイ」或は「エゾ」と訓むは。支那の河伯^{カヒ}娥眉^{カヒ}と共に音譯字にて其漢字を異にするのみであらう。或る方面から之を解説すれば。「カイ」は「エゾウ」と同じく。毛人の意味である。殊に此支那の河伯人は甚だ珠玉刀劍類を貴び愛すると同様に「アイヌ」も殊の外珠玉刀劍等を寶愛せり。且此兩者は海濱或は山中の河岸を撰て住居する所も甚だ似て居る。然るに惜ひ哉此河伯に就ては未だ其生活習慣等を記述せし書籍を閲讀する期會を得ぬ。唯北海道の「アイヌ」が支那の河伯と相往來せしは頗る太古よりの事であることだけは或る支那の古書にて一見せし事がある。

若し此河伯の習慣が「アイヌ」風俗と一致せる點でも發見せば大に氣焰が吐けるであらう。因て思ふに此河伯、阿無夷、蝦夷「アイヌ」など云へるは何れも同じ「タンクト」人種の一部落であらう。

更に眼を轉じて創世記の所謂「エザウ」なるものを見るに是亦其精神狀況と生活が。頗る我が北海道の「エザウ」に似たる所がある。此創世記の「エザウ」は「ヤコブ」と云へる羸弱なる弟を有せり。而して此羸弱なる「ヤコブ」が勇猛強健なる兄の「エザウ」を巧みに欺きて以て家督の權を握れる一劇の如き。頗る我が北海道の強健なる「アイヌ」乃ち「エザウ」を巧みに隨はしめ居る羸弱なる「ヤコビ」「シヤモ」に酷く類似せる所がある。

見よ創世記の活文字は切初の歴史を談つて曰く。

「エザウ」は家督の權を輕んじたり。と

果して然り。北海道の「エザウ」も又家政を輕し錢あれば則ち連日豪飲を事とし家産を蕩盡するも敢て意に介する所がない。且創世記の活文字の「エザウ」は毛深くして獵人なりと云へる如く。北海道の「エザウ」も又毛深くして獵人である。思

ふに此「ヤコブ」なる言語は太古世界共通語にて。圖らず我が國に傳はり居たるものであらう。开は我等日常纖弱なるものを指して「ヤコフ」なつたとか「ヤコヒ」やつ。など云へる纖弱なるものを稱する俗語にて。創世記の「ヤコブ」と同じ意味である。而して「エザウ」なる語も又我が國上古より稱し來りし所なるのみでなく。明かに日本紀には「エザウ」は大毛人なりと註してある。

予北海道に到る毎に常に「ヤコヒ」「シヤモ」等が彼の毛深く強健なる獵人の「エザウ」を欺き以て彼等の家督の權とも云ふ可き北海道領有の權を占有せる所を見る毎に益以て斯感を深める所である。

此他創世記に「カイ」又は「カイナン」と云へる語がある。而して「アイヌ」にも亦此「カイ」「カイナン」と稱することがある。因て思ふに此「カヒ」は前の河伯、娥眉と同じく何れも太古世界共通語ではあるまいか。又本邦の「アタコ」愛宕は。創世記の所謂「アタム」と同一神名なるべく。此「アタム」のムがモと轉じ。更にモがコと再訛せしものであらう。而して此「アタム」「アタコ」は共に「アタンコ」即ち天狗と音韻を同するのみでなく。本邦の愛宕神社は總て此天狗サンを祀れるのである。

已に前に一言せる如く。支那の「阿無夷」は「アタム」の少しく轉訛せるものにて。「アタム」のタが落ちて「アム」となり更に「イ」の音が自然に生じて遂に「アムイ」となりしものであらう。「アイヌ」語にも亦是「アム」と云ふ語がある。

然るに此「アイヌ」の「アム」は省略語ではなく。立派なるサンスクリットにて。天地若しくは陰陽又は男女と云ふ意を有する由である。處が奇妙なるは「アイヌ」が立派に模様中に此「アム」と云ふ。サンスクリット文字を巧みに應用して居る。之に因て思ふに天狗は「タンクト」の音譯字にて。日本語の「アマイヌ」「アタンゴ」支那の「アムイ」又「カヒ」。北海道の「アイヌ」「タンコタン」等と共に「タンクト」人種中の部落々々の稱呼と爲りしものであらう。

而して此天狗は所謂婆羅門の一派にして。僧正。大仙人など云へるは何れも婆羅門の位階である。予が已に繰返して説けるが如く。北海道の「アイヌ」が支那の仙人と甚だしく似て居て。所謂「タクタ」人種と風俗習慣が同一なるは。大に研究趣味ある問題である。

婆羅門は「バラモン」と稱すれども。其正音は「ブラマン」のよしに聞けり。因て思

ふに天狗を以て最も有名なる山城國鞍馬山「クラマ」は「ブラマ」の少しく轉りたるものであらう。而して此山の奥の天狗がすめる所を。僧正が谷と稱するは。婆羅門の僧正に似て此間何かの消息があるやうに思ふ。此他。

彼の俗に鞍馬山の「トリテンク」と稱することがある。斯は初初石器を使用せし「トルテツクメ」人てなからうか。猶一層研究を積て然る後之が説明を試みん。

豎穴考 (一)

北海道又は千島樺太の各地に散在する所の數多の豎穴は。石器土器等發見のため一の不思議なるものと解釋されて居る。斯は「コロボツクル」と云ふ短小なる人類があつて「アイヌ」以前此豎穴に棲息せるものと云ひ。隨て此豎穴に就ては古來の學者は色々な幻象を描て居る。就中松浦武四郎氏が此「コロボツクル」を以て古人と斷定せしは萬綠叢中紅一點である。

既に前卷にて一言せし如く。此「コロボツクル」は古代の毛深き「アイヌ」であらう。見よ此豎穴は「コロボツクル」の外に「トンチンカモキ」或は「チセクル」とも云ひ。土中

のものと言ふ意を表して居る。けれど土穴に住居せるものと云ふ意は些とも見えないのである。故に之を連続して「コロボツクルトンチンカモキ」と稱するとき。葦冬葉下土穴の神と云ふ意にて。一入の趣味を覺ゆるのである。葦冬の生ひたる下の土穴の神とは明かに其死人を表して居る。

然らば此堅穴を研究するには。第一穴の形状が何等宗教上との關係有無。穴中より發見せし遺物の種類及び配列の模様等に就て精細なる調査を遂げざるべからずと思ふ。因て聊か余が多年實見せしものに鑑みて一言を述べん。

予は已にアイヌを以て。天狗徒則ち婆羅門に類せりと假定せり。此堅穴も又何等かの關係あらずやと推測するものである。

夫れ婆羅門の貴ぶものは水火を以て首位となせり。而して此水火に三昧耶形なるものがある。所謂。△は火の三昧耶形にて。○は水の三昧耶形。□は地の三昧耶形。◇が風である。然るに今此堅穴の形状を見るに。宛然此。火大。地大。水大。風大。を表して居る。

余が北海道各地にて實見せし堅穴の種類は明かに。

○、◇、△、□

此四類より出来て居る。斯中圓形尤も多く。之に次で四角。半月と三角は稀に之を見るのみである。

彼の内地古代の五輪塔なるものも又此三昧耶形にて則ち。

△○□

斯如うなる形を表して居る。

堅穴は此五輪塔の如くに重疊せずと雖ども。其理は同一である。

然れば上古の人種が如何に此四大を貴びしかを知るべきである。

大にしては堅穴に之を用ひ。小にしては方穴圓形の一厘錢に於て之を見る。夫れ支那にて錢を指して泉と稱するも又此水を意味せるものであらう。而して中央の方穴は地を表せしものであつて。所謂地大にして水大なる眞理を應用せしものであらう。或人曰く錢を泉と稱するは。水の地中を流れて。廣く流通するに比せしものであると。

然ども余は三昧耶形の眞理によれるものならんと考ふるものである。

本邦の寛永錢に。二輪水。三輪波。を用ゆるも。又此意の應用に外ならないと思ふ。

アイヌ模様にも又此一輪波。二輪波。三輪波。を用ひ。就中尤も巴を貴重するは又此理によれるものであらう。

圓形を以て水となし。方形を地となすにより。彼の方穴圓形の古錢を以て古墳内に供養せしものであらう。

此方穴圓形の珍物は文字有て以來の出来ものかと云ふにそうてはない。純然たる石器供養時代に於て已に盛に使用せしものである。

此石器時代の方穴圓形は重もに獸骨を以て造れるものにて。今日の一厘錢より甚だ小さく。左に示す如うなるものである。

○
大實 (北海道釧路國釧路町字ヌサマイ堅穴より發見)

右は明年四十四年中。釧路支廳にて或る工事の際に堅穴を發掘せし時。一穴より人骨石斧石礮土器等と共に同時に發見せしものにて。此方穴圓形數百個ありたり。此方穴圓形に就ては。右の骨製の他に尤も貴重なる發見物がある。開

は陸奥國二戸郡福岡町の近村に於て。古墳より發見せし無文古銅錢なりとす。此無文銅錢は右の骨錢より稍大きく寛永一厘錢より少し小なりき。而して之れ又一墳墓内より一時に數百個を得たりと云ふ。堅穴發見のものと對照して一入の趣味を感ずるのである。

夫れ支那及び本邦に於て。所在山川の古墳よりして。古錢を發見することは屢ば實見する所なるが。就中尤も奇怪なるは。陸奥國七戸村に於て警察署新築工事の際に。圖らずも一個の瓶中に支那の古錢と石礮を混入せしものを發見せし如きは嘘言の如くな事實である。

之等の古銅錢は。銅鐵鑄造の術發達後の遺物にて。其使用年代及び埋葬の年限を知ることを得るも。彼の北海道釧路の堅穴より發見せし所の骨製品は。純然たる石器時代の遺品なれば。之等は大に研究を要する問題であらう。然れば石器時代とても左まで遠き太古にもあるまい。此方穴圓形を以て果して余の推測の如くに。地大水大を表して墳墓の供養とせしもので。堅穴も又此眞理を應用せしものとすれば。此間石器時代よりして金屬時世に至るまでの徑路を辿

りて。限りなき趣味を覺ゆるのである。

夫れ密宗にては。可。即ち水に關しては之を神秘として。其解説を容易に世人に授けざるのみでなく。彼の秘密辭林にまで説明を避けて居る。斯如うな神秘的文字は予も又秘密辭林の眞似を守らんかな。(以下次號)
挿畫は合本に譲る。

石器供養の墳墓

邈焉たり伏儀神農。太古の事蹟は研究の緒を發見すること甚だ難し。夫れ金屬の發見以來已に五六千年の久しきに及べり。斯間金屬製品と石器器具の兼用盛なりし時代あり。吾人は今便宜上假りに之を石金併用時代と名命せんと欲するものなり。

夫れ金鍔は腐敗し易くして石器の如く長命ならず。然ども石器と金屬器具を同一墳墓より同時に發見することあるは屢實見する所である。并は別に説明せん只今此石器を發見せし墳墓に就て一言を試みん。

予が研究にては此石器を供養とせし墳墓に五種以上の制あることを發見せり。則ち。

第一 石棺を有するもの、(豊前國耶馬溪平田村にて發見)

石棺内に人骨、石斧、石礮、土器破片、及び腐敗せし刀劍あり、附近一帶石器土器破片散在例の如し。

第二 炭塚、(飛彈國吉城郡上寶村新田區發見)

炭の中に人骨、石器時代の曲玉、管玉、石棒、石劍、土器、石礮、石斧、數多發見す

第三 積石塚、(陸奥國岩木山麓岩鬼神社前發見)

積石の中より石臼、石棒、石冠、石斧、土偶等を發見す。

第四 竪穴、横穴、(北海道諸所に散在す)

人骨、石斧、石礮、土器、石器時代曲玉、等發見す。

第五 貝塚、(北海道北見國常呂村二ヶ所發見)

貝殻の中に人骨、石器、土器、刀劍、珠玉、等あり、

(已上五種の人骨石器配列實寫圖は合本に之を載す。)

右の中第一の石棺を有するものは。豊前國下毛郡平田村(耶馬溪)西淨寺の所屬なる。サイノ神と云ふ小なる無格神社の神殿を取り除きて。之を田地に変更せし時。此サイノ神の祠の直下に有りしものを圖らず發掘せしものなり。石棺は所謂船形なるものにて此棺内に南を枕として人骨あり。(骨格甚だ長大にて齒の數多し)。

而して頭骨の前に土器の破片三枚(完全のものなし)外に石斧完全なるもの三枚石礮數本配列しあり。祠の附近一帶石器散在せること他の石器散在地と同じ。石器は現に予之を採集して西淨寺に在り。

第二の炭塚は。飛彈國吉城郡上資村字新田區。上野某の所有地山畑にて。林檎を栽培せんとして苗木を植ゆる際。圖らず發見せしものなり。高原川の沿岸凡そ二反歩餘の畑地にて此炭塚八九ヶ所を發見せり。而して此炭塚は地上より三尺餘下にあり。炭を積み重ねたる厚さは一尺乃至三尺餘にて。炭の廣さは縱横共に六尺以上あり。此炭の中に人骨、石器時代の曲玉、管玉、石礮、石棒、土器、石臼、其他名稱の不明なるもの等數多發見せり。

第三の積石塚は。陸奥國岩木山麓にある岩鬼神社の前にて發見せしものにて。不自然なる小石を積重ねたるものなりき。此積石を取除きたる所が。其中よりして。石臼、石棒、石冠、石礮、石斧、土偶等を數多發見せり。石冠は飛彈國産の品と頗る相似たり。土偶は首胴切斷し居り兩腕なかりき。

第四堅穴、横穴は堅穴考の部に委しく之を説明せり。就て見る可し。

第五の貝塚は。北見國常呂郡常呂村字 　　に於て葛西鐵太郎氏の宅地附近にて發見せしものなり。此附近一帶に貝殻夥しく散在し。石器土器等數多發見せり。其中にて居宅前に一入貝殻の多き處あり。此貝殻を發掘せしに。圖らず人骨刀劍、内耳鍋、球玉、石斧、石礮、其他種々なる遺物を發見せしものである。

上述の如く石器時代の墳墓とも見る可き。遺物發見地は。予自から實地を踏査し且つ石器を採集せし所にて。其採集品の一部は予之を所藏せり。

是等に因て考ふるまでもなく。石器、土器を墳墓の副葬品と爲せし時代ありしことは確實であらう。

此に於てか。吾人は更に虎穴に入りて虎兒を獲んとの研究心を喚發せり。然

らば此太古の人民は如何なる方法にて。斯如うな不思議なる遺蹟を貽せしもの乎。吾人の進んで研究せんと欲する處は斯問題である。

今日佛家の窆塔婆に大書する所のものは。地水火風の四大に過ぎない。之れ何の眞理を含めるものぞ。云ふまでもなく一片の空理であるが。此空理が乃ち眞理である。然れば上古の俗死人に副ゆるに。石礮、石斧、石劍等の兵器を以てするもの。又是一片の眞理に過ぎない。此石器を如何なる儀式によりて之を供養せしか乞ふ。暫く予の説明に服従せよ。

曠昔曾て我之を聞く。太古の人民死を吊するの情甚だ切なり。其葬儀の如き吾人の想像すべき處にあらず。

其葬儀に供せんが爲め。富有者は家毎に必ず二三頭の駱駝を畜を倒とせり。若し駱駝を得る能はざるものは。他の動物を以て之に代ゆと云ふ。偕て此動物をは何の役に用ゆるもの乎。

上古酋長の如き有力者の葬儀には。兼て其家に畜ひある處の駱駝をして棺を挽かしめ。豫め設けある所の埋葬場に至りて。右の棺を壙穴に埋め。生前身邊

に愛玩なせし遺愛品を副葬なし。瓶及び斧刀劍礮の類を供養として棺内に配列し。(本邦上古の齊瓶、齊斧、齊槌の如き此類なり)其上に土を蓋ひ了りて。駱駝をして壙穴の四周を巡回せしめ。其足跡に一々石礮、石匙の類を散布するなり。偕て石器を散布し了せて而して後件の駱駝を子駱駝の眼前にて祀殺し。其血を以て墳墓の土を染めしむるなり。一度血に浸みたる土は幾十年を経過すとも。血の臭氣を存するにより。次回埋葬の標識となるものなり。斯くて以前に祀殺せし駱駝の子が生長し子を有する時に至りて。再び葬儀を行ふにあたり。前年の如く此駱駝に棺を挽かしめ設けの齊場に至れば。往年親の祀殺せしめられし處にて。其土の臭氣をかぎ哀泣するによりて。前年何れの地に埋葬せしかを知り。則ち其傍に於て例の如く埋葬するなりと云ふ。

斯は唯其概略に過ぎざるなり。然ども一考に價すと云ふ可きなり。

北海道アイヌの熊祭が何等此儀式と關係あらざるかを考ふ。开は研究を積て之を説述せん。婆羅門に一種の祀殺なるものあり。比較研究せば大に趣味あらん。古書に曰く。

作_二馬祀_一者。衆生初起稟_二於妙氣_一。得_二妙四大_一。則生_二常天_一。若稟_二鹿氣_一得_二鹿四大_一。則生_二人中_一。爲_レ求_二常天_一。故修_二馬祀_一。取_二一白馬_一放_レ之百日。或曰三年。尋_二其足迹_一。以布_二黃金_一用施_二一切_一。然後取_レ馬殺_レ之。當_二殺_レ馬時_一唱言。婆藪殺_レ汝。馬因_二祀殺_一亦得_二生天_一云々。

熊と馬は家畜と否との差異あるのみ。其生物たるは一なり。百日以上三年の放牧は。アイヌの熊兒を養育すること百日以上三年を期として之を祀殺すると其期日の一致せる點は。最も趣味多き問題である。

然ればアイヌの熊祭は此婆羅門の馬祀と同源であらうか。亦墳墓の犠牲の俑を爲せしものであらうか。

上古の事は漠として之を徵す可べき古書に乏し。之れ大に遺憾とする所なり。アイヌ上古の熊祭の儀式は之を知るに術なし。夫れ今日の熊祭の如きは一場の遊戯に過ぎざるなり。

(本章には十餘種の挿畫あり开は合本に譲る)

古代アイヌの星の世界探検

アイヌの天文に關する智識は固より文明社會とは比較すべからずと雖ども。彼の星の世界交通談の如きは慥かに趣味多き傳説なり。

火星に人類が生息せりとは。近頃に至りて泰西學者の發見する所にして。其所説を聞くに。望天鏡を以て火星を觀測するに大氣が深く圍繞せるを以て。人類が棲息せるならんと云ふ。推測説に過ぎぬ。

然るにアイヌの星の世界談は斯如うな想像にあらず。太古より幾多のアイヌは此星の世界へ往來せりとて。星の世界の人類の生活狀況を傳へ居れり。西洋學者の推測説より趣味多く。且つ和漢洋の古書中には曾て其類似の説あるを聞かざる所なり。

扱て斯奇怪なる星の世界へ如何なる術あつて往來せしか。第一に吾人の聞かんと欲する所は是なり。

之に就てアイヌ談して曰く。凡そ星の世界へ到らんと欲せば。豪なるもの

は飛鳥の如く昇騰し去ると雖ども。弱者は蒼空を仰て咒文を唱し。天より細き繩の如き蛇の降下し來を待て。之れに把持し而して後漸く昇登することを得と云へり。

古來幾多の「アイヌ」が此星の世界へ往來せしが。就中尤も有名なるものは。「シヌタプカタカモキラレトク」と云ふ。馬鹿に長き姓名の者にて。之に次て「オタスツウクル」と云ふ者あり。此二人者は大神通を得。空中を飛行し或は水底に入り土中に潜み。隱身出沒自在なりき。然るに此二人者が。星の世界に到り如何なる土産談をか齎し來れるかを見よ。

此奇怪なる星世界には廣大なる原野ありて。清烈黄金を湛す如き川流には黄金色の奇魚群をなし。織々風に櫛る柳は黄金にて造れるかを疑はしめ。鼻々たる杖履の音は鈴聲の如く。其往來せる道路は總て之れ黄金の山なりき。而して馬に似たる鹿の如き黄金にて鑄れる如き燦爛たる珍獸は無心にして人に従ひ來り。其景色は鮮妍として眼を眩するばかりなり。此黄金世界の人類は一齊に均しく其着服に黄金にて日輪と三日月形の美麗なる紋様を刺繡せるを見たり。而

して此人間は容姿端正にして。顔面雪の如く白く。其言語は朗々として金聲の如し。之等の神の食物はある植物の實にて半分は赤くして半分は白し。此實を二箇に割りて鍋に投じ之を煮る時は一層倍加すと云ふ。アイヌ此食物を「カモキマム」と稱せり。アイヌの予に談じたる所は斯の如く簡にして略なるものなりき。之に就て予思へらくアイヌの所謂星國は彼の上古日本を日の國と云ひ、朝鮮を月の國と稱し。濟州島を星國と云ひし。所謂此濟州島にあらずやと。然るに豈に圖らんや是が真正なる蒼空而かも西南に現はるゝ所の夜明の星アイヌ之を「サツサツト云ふなりき。アイヌ曰く蒼空を仰げば數限りなく多くの星あるにあらずや。然れどもアイヌの往還なせし處の「ニサツサツ」を措て其他の星には未だ曾て到りしものなく。人類其他の有無の如きは之を聞かず。而して彼の盆の如く大なる「クンネチブカモキ」即ち月には人類動物は云ふに及ばず。一片の草木もなしと云へり。

「アイヌ」の「ユウカル」「ウエタ」と信濃國上田

「アイヌ」に「ウエタ」と稱する一種悲哀なる「ユウカル」唄がある。其大意は。上古或處に「シナムブ」極樂國と云ふ意と云ふ。葡萄やコクワの繁茂せる國があつて。此國に一部の都會を建設し居たるに。ある時不意に背後の山嶺から大火を噴き出し。轟々たる響は天地も今や破壊せんかと思はれ。大なる焼石を飛ばし。熱湯の如き焼灰を降らして。山川恰かも暗夜の如く。慘憺たる狀況は怖しなんと云ふばかりなく。瞬間に此都會や又「チクマベツ」と云ふ「シナムブ」第一の巨川を埋没せり。其がために幾萬と云ふ人民は救を求むる術もなく。あわれ蒸熱地獄に埋没して焼死せり。然るに幸か不幸か其中に此天災を免れたる一家族があつた。けれども何しろ未曾有の天變にて見渡す限り慘憺たるありさまにて。川は埋まり山は焼け。草木とては一枝の残れるものとはなす。眼に觸るゝものは磊々たる火の如き焼石と。踏むだに足の爛るゝ如くなる降灰にて。一片の肉一粒の粟をも得る能はざる悲境に陥りたり。斯くて救を訴ふるものもなければ。いつまでか空腹を凌ぎて居るべきにあらねば。何れか食物を得る土地に往かうとして父子打連立て旅路に就きたり。かくして父子一家七人のものが。明くる日も

又翌る日も一粒の粟だに口にすることを得ずして。焼灰を踏みつゝ往くほどに。今や空腹に堪へがたく。父が母子に向つて言ふには母子よ斯く一粒の粟だに口にするを得ずして歩行するは。定めて飢渴に迫れるてあらう。我は今此處にて死せん。母子よ余の肉を喰ひて飢を凌ぎ呉れよと。而して死せり。母子七人のものは悲哀の中にも。父の遺言に従ひ。涙を吞て父の肉を食ひて飢を凌げり。因て其所を號けて「ウエタ」人飢へて人を食ふと云ふ語「上田」と云ふ。それから又母子相携へて廻り行くほどに。只茫々たる原野のみにて更に人家とてなければ食物を得る術なく再び飢に迫れり。今や餓死に瀕せんとする時。母が五人の子供に言ふやう。我が血を分けたる最愛の兒よ。曩には父の肉にて纔かに露命を全うするを得たるが。今や再び餓死に瀕せり。願くば妾今此處にて死なん五人の兒よ。予の肉を食ひて飢を凌ぎ食物を得べき所に至れよと。言了りて死せり。即ち五人の兒は母の遺言の如く涙を吞て其肉を喫ひ。更に歩行を連けて遂に草木繁茂し。鳥獸群をなせる良土を發見することを得たりと云ふ。如何にも悲哀なる曲である。今此「ユウカル」を一考するに、極樂國なる「シナムブ」は信濃國と同

稱にて「チクマベツ」は即ち今の千曲川。「ウエタ」が今の上田と同稱にて。些との音韻上の轉訛を認めぬ所である。葡萄やコクワの繁茂せる國は今にても甲斐信濃は名産國である。

アイヌの此「ユウカル」は太古信濃國の大噴火の大慘狀を聞き傳へて。之を例の「ユウカル」に作りて唄ひ來れるものであるまいか。

北海道には固より「チクマベツ」なる川はなく。又「シナムブ」と云へる邦がない。支那朝鮮にも勿論斯如なる國名又は川のあることを聞かぬ。

ホーマの詩によりて地下のボンペー市を發見せし如く。此アイヌの「ユウカル」に因て焉んど。切初の天國を發見することを得ざらんや。

平親王將門と大江山酒吞童子

相馬小四郎將門が。下總國猿島に於て偽宮を建て。自から平親王と稱して文武百官を備へ。宛然獨立王國を形成せりと云へるは。最も趣味ある傳説である。それ當時の國勢を考ふるに。尾張以北は蝦夷と稱し。其風俗習慣は維新前後

に於ける北海道アイヌと同じく酋長制度なれば。此將門は恐らく總房一帯の大酋長であつて。其權勢王公の如く十數人の妻妾を待坐せしめ豪華な生活をなし居たるものであらう。

余往年滑川に客遊せし際。所謂偽宮の跡。及び京都に擬して建立せしものと云ふ寺院の遺趾を一見し。又將門愛妾一族の墳墓と稱する百穴を見。且つ其穴より發見せし八稜古鏡を一見せることがある。

此百穴は諸國に於て發見せる所の。所謂横穴と同型のものにて。彼の陸前國遠田郡トウトウにある蝦夷穴と同稱のやうに考ふ。是に因て思ふ。此横穴は蝦夷人の墳墓の一にて。天慶以後に至るまでも盛に築造されたものと思はる。

尙將門を平親王と稱するに付て思ひ浮ぶことがある。并は越中國と飛彈國の國境の深山に。ゴカ。と稱する頗る太古の孤村がある。而して此村の土人を平家の子孫と言ふて居る。又九州肥後國にも同じく。ゴカ。と云ふ山中の部落があつて。之れ又平家の子孫と聞て居る。此他にも加賀國白山の背後にて。頂上から一里餘下絶壁千仞。人馬往來の出來ざる深山の中に言語不通の怪人間が居

る。戸數僅かに三戸家族男女十數人のみ。彼等は自から。センケ。と稱して居る。又四國第一の高山石槌山の中腹に。センケ。と云へる部落がある。三十四年前までは天狗サンと云ふて誰も近づかなかつたと云ふことである。

今此等の奇怪なる太古の遺民を總合して一考するに。本會の所謂タンクト乃ち天狗人種と同一の珍人類であらうと思ふのである。

ぞれ。センケ。は。ハイケ。と轉じ易きこと。猶。タンコ。とテンコ。の如く些少なる言語上の訛である。故に肥後のゴカ又は飛彈のゴカはセンケのセがゴと訛りケがカと轉りたるものであるまいか。而して此。センケが更に聞き様にてへイケと響き。之を早合點して例の平家の隱家など、誤認せしものであらう。

將門の如きも又此センケの一族にてへイケと轉りて遂に平親王など、後人が附加せしものであらう。

大江山酒吞童子を以て。將門の實子なりと云へるは頗る愉快なる傳説である。此酒吞童子の垂髪がアイヌの如くて又酒を嗜むことアイヌと匹敵すと云ふても

罪にはなるまい。此酒吞の首は切つても直に元の如くに着けしと云へるは。一場の昔話と思ひの外。今日のアイヌも又た之れと同じやうに顔面或は腕にても接着けることは事實である。

茲に徳川時代のことで趣味ある一例を述べやう。世に傳ふる所の天一坊は其實は遠州秋葉山伏の修驗者で。源氏坊天一と稱するものであるが。此者近々秋葉一山の總領となると云ふて。平常上疊に坐して部下に對面なし。宛然將軍の如き權勢を振て居たりしたために。遂に世評に上つて世に傳ふる如き怪漢と誤まらるゝに至りしものである。徳川時代の山伏すら此の如き貴族的生活をなせしものである。天慶時代の山伏も一派の首領は王公を凌ぐ權勢を有せしものであらう。故に大江山酒吞童子も又此山伏にて一派の首領として勢力のあつたものであらう。其シユテンドウシと云ふは。酒吞童子ではなく。修驗道士を例の滑稽漢が後世に至りて漢字の變更を企て一關の小説を作りしものであらう。因て思ふに將門も此山伏にて一派の總領として又會長として斯如な王族的生活をなせしものであらう。

本邦の山伏は天狗の流を汲めるものである。

不思議なるアイヌのト占實驗談

釧路國桂戀(カツラコヒ)アイヌ部落に一人の年老ひたるメノコが居る。此メノコ不思議なる精神作用を有し。最もト占に妙にて吉凶禍福は云ふに及ばず一言半話の間に其人の犯し來れる過去の善事惡事等立どころに看破すと云ふ。予厚岸に客遊の際偶此メノコを村内有志が招請してト占を乞へり。時に或有志が難病にて百方醫藥に心を勞すれども些の効なく。大に沈吟し居る者あり。此メノコに請ひて之をトせしめたるに。メノコ曰く。前は猫つれて來たの。と云ふ。病者曰く我が家會て猫を畜はすと。メノコ重ねて曰く。前は猫を殺いたの。と云ふ。病者曰く。如何にも猫を殺せり今は今を距ること二十年前。檜山地方に在りし日に。帆立貝の柱を晒し置きしに。偶猫來りて之を食ひ盡したり。因て立服して之を撲殺し。繩で縛して石を着け而して海中に投じたり。とメノコ曰く。其猫の崇りなりと。病者曰く如何すれ可なるか。メノコ曰く。小豆と何

々を混じて之を炊き。俵のサンダラの上に盛りて鳥カラスに與へよ。若し鳥が之を食せば全快すべく。食せざれば治し難しと。因て其教の如く爲せしに。幸にして鳥之を食ひしかば。果してメノコの言の如く日ならず全快したり。之を聞き本會々員田村氏が人を介してトを頼みしに。メノコ曰く。前は二人來りしかと。之れ田村氏が人を介して頼みしによれり。重て曰く神さま已に先に歸られたりト占こと能はずと。斯如うに人の心中を看破すること宛かも神の如し。豈に不思議の至りならずや。

アイヌのト占には種々なる方法がある。彼龜トに類するト占術の如きは。人の遍ねく知る所であるが。此メノコの觀相術は他人の學び得べからざる特技と考へらる。

彼の自家に坐して居て。近所の川へ廻り來る所の魚類を看破したり。又明日誰某が試しに來ると云ふことを前知することは。所々のアイヌに往々見る所である。

タンクトと象形文字

語に曰く。蒼頡文字を製し天粟を降らすと。此鬼神を感哭せしめたる蒼頡文字とは如何なる象形のものであらうか。

某曰く此蒼頡は乃ちタンクト人種なりと雖ども。其の所謂鬼神を哭せしめたる文字は。如何なるものであるか之を知らずと。予今古代人種中にて使用せし種々なる儀式に就て之を考ふるに。所謂漢字の象形文字に酷似せるものが數多ある。且つアイヌの祭器及び儀式中に頗る多く之れに類似せるもの有るを認むるのである。

予は固本邦先住土人即ち天孫人種以前の先住民を以て。此タンクト人種であるまいかとの考を有するものである。故に勢ひ古來の記録に記する所。及び今日に至るまで襲ひ來れる所の或者に就て。此象形文字を製することを企つる所である。

此タンクト人種祭祀を執行するには。神壇を距ること數十歩前の地に於て。

根こきにせし根付の樺の木二本を道の左右に植へ。偕て此木と木の間に七五三を張り。以て此七五三以内の地に不淨物の入ることを許さないのである。

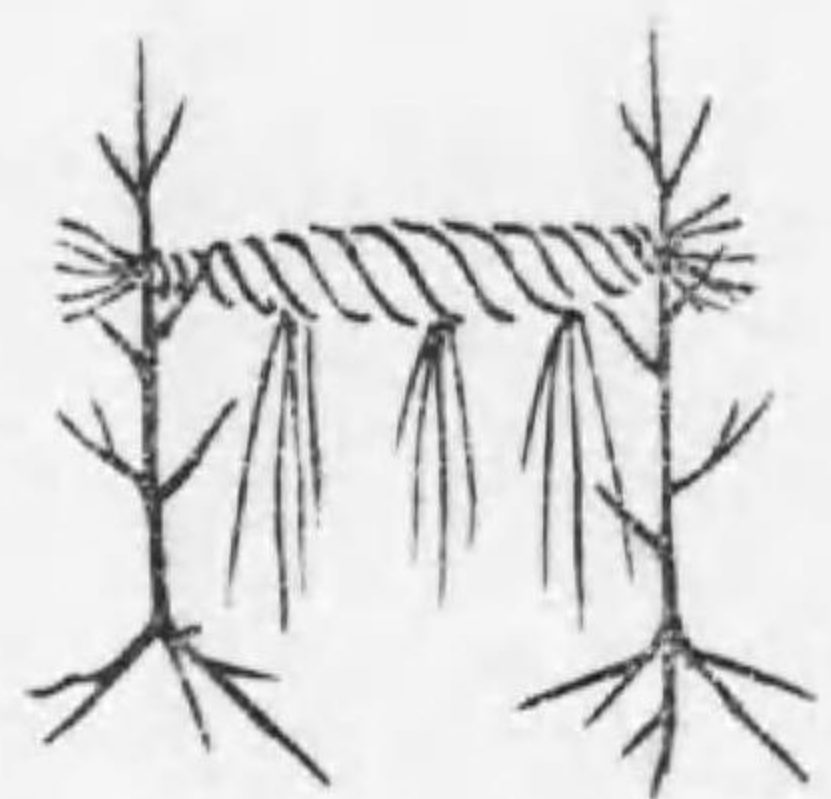
然るに本邦古來の祭事が之と酷似して居る。彼の天照大神の岩戸隠の時已に之と同一の神事があり。今日にても尙盛に此例を認むる所である。本邦の祭は只樺の代りに榊を用ゆるの差があるのみである。今本邦神事に用ゆる所の七五三を見るに。



斯如であつて明かに漢字の示の象形である。且つ此七五三を「シメ」と云ひ。漢字の示を「シメ」と訓むにても知るべきである。此「シメ」シメと云へるは或る一物を標識として。彼所には斯如うなものがあつた。此所には此様な者が居る。故に猥りに此内に入出するはならないと云ふことを知らしむる意味であらう。故に七五三を張りて以て此内には斯如なる神があるゆゑ。不淨なものが這入るべからずと云ふ標識であらう。

今此木と木の間に七五三を張れるものを例の象形にて之を表すれば。上圖の如くて漢字の禁字其儘である。

上述の如くに。古來本邦にて執行し來れる所の儀式が。此
タンクト人種の儀式と相一致する所あるは頗る研究を要す
る問題である。



今北海道アイヌ間にも同様なる習慣があるであらうと研
究の効空しからずして。果して之と同種の祭事のあること
を發見せり。乞ふ次卷に於て之を説明せん。

天狗に魅まゝる辯(二)

それ油斷すると。不圖人間が消滅し行衛が解らぬやうになることがある。开
は天狗が連れて行くのであると云ふが。我が飛彈や隣の越前加賀能登の諸國に
は殊に尤も甚だしい。予は之に就て兩様の意見を有て居る。甲は何者かの仕業
にて。乙は精神病者の狂言である。斯如うな奇怪らぬことは我邦のみかと云ふ
に決してそうではない。支那に於ても古來山中に入り仙家に至つて數百年も生
長した例が多くある。此仙人とは本邦の天狗と同一人類にて婆羅門の一派なる

ことは。アイヌの支那仙人に酷似し又所謂天狗とも同一なるに徴しても解る。
故に支那の仙郷に至れるは。本邦にて天狗社會に至りしと同一であらう。

今茲に古來支那の古書に散見する所の所謂仙郷談と。本邦にて天狗社會に至
りしと云ふ傳説を比較研究せん。

(續齊諧記) 漢明帝永平中。鄰縣有劉晨阮肇。入天台山採藥迷失道路。糧盡
望山頭。有桃。共取食之。如覺少健。下山得澗水。飲之並澡洗。望見蔓菁
葉々從山復出。次有一杯流出。中有胡麻飯屑。二人相謂曰。去人不遠。因過
水行一里。又度一山。出大溪。有二女顔色絶妙。世末有。便喚劉阮姓名。
如有舊。喜問郎等來何晚。因邀過家。應館服飾精華。東西有床。帳帷設七寶
瓔珞。非世所在。左右直悉青衣端正。都無男子。須臾下胡麻飯山羊脯。甚美。
又設甘酒。有數十客。將三五桃至來慶女婿。各出樂器歌調作樂。日向暮。仙
女各還去。劉阮就所邀女家止宿。行夫婦之道。留十五日。求還女曰。來此皆
是宿福所招。得與仙女交接。流俗何所樂遂住半年。(自カラ以テ半年トナセド
モ人間已ニ二百餘年ヲ過グルヲ知ラザルナリ) 天氣和適。常如三月。百鳥哀鳴。

悲思求歸甚切。女曰罪根未滅使君等如此。更喚諸仙女。共作歌吹送劉阮。從此山東洞口去。不遠至大道。隨其言。果得家鄉。並無相識。鄉里怪異。乃驗得七代子孫。傳聞上祖入山不出。不知何在。既無親屬。栖泊無所。却欲還女家。尋山路不獲。至大康八年。失二人所在。(略)

斯如なる傳説は例の支那一流の筆法にて潤色せしものにて。固より信憑するに足らざるも。仙女對人間の結婚が如何に面白く行はれ居たるかを想像すべきである。

本邦の浦島太郎龍宮乙姫の昔話と對照して一入の趣味を覺ゆるのである。龍宮と云へば魚籠鮫鱈の巢窟なる蒼海の底と聞くが。此劉阮の至れる仙郷は峨々たる大山の中である。其仙女乙姫と夫婦の道を行ひたる點は同一なると共に。故郷の情切なるに禁へず。無事に歸ることを得たるも。一は半年と思ひしに已に人間二百餘年を過ぎ居りて七代の子孫に耻を見。一は玉手篋一件の爲め忽然として。童顏皺面と變じ去り。刹那に碧髮變じて純白となりし所が。最も面白く覺ゆるのである。(未完)

アイヌの演劇

藝名ウチャシクマ

アイヌは天性頗る頓智に富み。時に臨み機に應じて尤も嶄新奇抜の趣向を以て唱采を博せり。山河草木は更なり。天象則ち星に托して作れる童話中。殊に勸善懲惡の意を寓せるもの甚だ多し。

今茲に尤も趣味多き土人の演劇を紹介せん。斯は明治三十九年三月三日の北海旭新聞に現はれたるものなり。其の如何に咄嗟に珍趣向を案出するかを見よ。東北三縣窮民救助の爲め十勝青年會は。去る二月二十四五兩日。帶廣舊小學校跡に於て。慈善演劇會を催せしが。其第二日目の最終に。伏古村舊土人「ホテネ」事伏根安太郎外數名が。殊に同會の旨趣を賛し。同會の爲め演せし。(ウチャシクマ)の事に就き左に其大略を摘記せん。(ウチャシクマ)とは歴史と云ふ意にして。今より凡そ五六百年前の事とかや。「オタスツ」の會長に「タンカアニ」と呼べるがあり。身體雄偉。人となり狂暴して部下のアイヌを遇すること甚

だ冷酷残忍を極め。絶えて其休戚を顧みず。己れは居常贅澤に其日を送り。婢妾の如き七八人の多きを畜へ。常に部下に對する生殺與奪の權の。己れが手中に在るを以て。亡若無人の舉動多く。アイヌ等は之を怨むと雖ども亦奈何ともする能はざりし。然るに一年早魃打續き草木枯死し。魚群來らず。爲めにアイヌは飢渴に迫るとの夥だしく。殆ど將に死に瀕せんとする窮境に陥りし事ありて。村民等は相協議し舊慣により數多の金品を。會長「タムカアニ」に献じ雨乞ひを托せしに。「タムカアニ」は其金品を受けつゝ雨乞を爲せども更に其功驗なく。斯の如くすること殆ど一年に涉れども一滴の降雨なし。而して「タムカアニ」は其金品を請求すること日に益す甚だしく。之を以て己れは唯だ自家口腹の慾を満たすの資となせり。さればアイヌは早魃及び「タムカアニ」の誅求とに責められ。村民の三分は已に死亡し殘餘のアイヌも今は殆ど堪へ難く。何れも其死の來るを待つべく。殊に悲惨なる境遇の中に其年も暮れ。明年となれども依然として雨降ることなし。是れ畢竟「タムカアニ」が狂暴を天痛く惡み賜ひしによるものなるべし。

偶々同部下に「ヒリカ」と呼べる極めて赤貧なる考翁ありけり。已も今や將に餓死せんとする所より。天に向ひて「タムカアニ」を罵りかゝる同情なき誠意なきものに。雨乞ひを托すればとて如何ぞ其功績あらんや。眞に雨乞ひをなさんと欲せば老翁蓋し術なきにあらずと。獨語せしが。此事いつしか「タムカアニ」の聞く所となり大に怒り。「ヒリカ」を拉し來り期日を定めて雨乞ひをなさしめ。若し降雨なき時は直ちに之を殺さんとせり。ヒリカ之を知り老翁の死は固より免がれざる所。坐して彼の毒手に斃れんよりは。寧ろ多數民の爲めに雨乞ひの禁厭を爲して死せんのみと。乃ち燧石を携へて山に上り。火を鑽りて火を焚き神に祈らんとす。然れどもヒリカ固より赤貧にして火を移すべき硫黄等を有せず。千慮萬苦の上遂にアカダモの根の腐朽せるを發見して。之に火を移すことを得たり。後世アイヌ之を用ふる如くなりしはヒリカより始まれり。斯くてヒリカは誠心誠意を以て。山の神川の神と天の神とに雨を恵まれんことを祈禱し終て河中に投じて歿せり。然るに不思議にも死後一週間に。一天俄かに油然として雲起り沛然として大雨滂沱たりしかば。爲めに村民は

僅かに蘇息することを得たり。さて當時まではアイヌの間絶えて佛を祭ると云ふことなかりしが。村民等はヒリカが恵を徳とし。其死を悲しみ肉體のヒリカは縱令死するとも。其靈魂は尙ほ死せず宇宙間にありて我々を呵護なし呉るべしとて。始めて之を祭れり。爾後今日に至るまでアイヌ間死者の靈魂を祭る風ある必竟是より生まれり。之を「シヌンラツバ」と云ふといふ。尙ほ其當時までは雨に風に總て氣候の不順等に關し。祈禱の法はありしも。禁厭の法はなかりしかども。ヒリカが此事ありしより以來其法始まり。ヒリカの名を冠して之を「ヒリカウステ」と名ぜり。

ウチャママークマの大意は斯の如し。今や聖明上にいまし絶えてタムカアニの如き事なしと雖ども。三縣窮民の慘苦は其昔オタスツアイヌの如けんかと思ひ。其句を演じて慈善に富めること古のヒリカに譲らざる看客諸君の觀覽に供せんとの意なりき。

尙同夜「タムカアニ」に扮せしは。「イサカンテ」にして其婢妾となりし者は。「ニヤンキレコ」。「イハウバツクテ」。「オボロ」の三人。「ヒリカ」の役を勤めしは「ホテネ事

乃ち伏根安太郎にして。始終之が説明をなせしは廣野市太郎なり。一讀覺えず寓意の存する所を諒せしむ。見よ如何に彼等アイヌが火の神を尊信するかを。山上にて火を燃き山川の神を祭るは是れ婆羅門の遺習なり。然り而して祈禱禁厭は所謂四吠陀論中。享祭祈禱。禁呪。是なり。アイヌは一言一話の中平常にても必ず火の神の尊ぶべきことを説けり。其タブカル。ユウカル。の如きは。十中八九は火の神を祭る寓意の唄である。

釧路國當路村のアイヌ

厚岸郵便局長谷川氏は。明治八年官命を奉じて。父と共に釧路國當路村に至り。爾後アイヌ戸長を勤むること二十餘年の久しきに及べり。當初シヤモにて當路に入りたるものは。氏一家にて三人目の由。最初アイヌのみの別天地とて。言語通せず頗る困難なりしよし。今氏の在職中見聞せし實歴談中尤も趣味多き一節も紹介す。

當路アイヌの家屋は何れも草葺にて土間に礎を敷き其中央に爐を設け。一方

に小なる窓を有すること他の部落と同じ。日々の常食は五穀野菜は勿論之れなし。ペカンベ(沼菱)に鮭の卵を入れて之れを鍋にて十分磨り合せ。之に鱈の油を混じて食せり。酒は内地酒の未だ入り込まぬ時分には。或木の實を以て造りたるも其醸造法は聞を得ざりき。言語は極めて清朗にて濁音がなく日本語を能く知り居たり。衣服は木皮の織緯又はをひやうの皮を紡績して布を織り。之にて厚司を製し内地の白紅等の木綿を切り種々なる紋様を作りて。巧みに刺繡を施すこと他部落と同一である。

・此當路の婦人の子を産むときは。他人は勿論亭主をも近づくことを禁じて。必ず屋外に出て雪の中に輪のやうに丸く屈みて産をなすのである。そして産後一週日の間は食事を爲さず。孩兒を抱きしまゝ雪の中に丸く屈んで居て。一週日を経て始めて起き出て産兒を冷水にて洗ふのである。此雪中に孩兒を抱きて屈み居る間は一切言語を禁じて居る。

若し知らぬものが棒で突ても答を爲ないと云ふ。毎年冬期には熊狩を催すが先づ五六人一隊となつて。弓矢を携る外一粒の粟をも携へず。山又山と狩り巡

りて熊を獲ない間は。幾日でも食事を爲さず。熊を捕ゆれば其肉を生にて喰ひ皮のみを携ゆるのである。そして山中で大降雪に逢ふ時は。宛かも禪僧入定のやうに。兩手を組み丹田にをき。雪中に端坐して默然半語を交ゆることなく。坐ながら其儘雪中に睡眠するのである。斯して雪が次第に降り頻りて。一夜に五六尺も積りて。アイヌを埋めて了ふとも些つとも動くことを爲ない。するとアイヌの呼吸のために口頭より一線の小さき穴が出来て此穴から呼吸をするのである。雪が降り止めば此穴が明るくなりて霽れたことが分かる。すると又起出で再び山又山を狩り巡るのである。熊を獲捕するには多く毒矢を用ゆるも。時々空手格闘して之を倒すことがある。もしその毒箭をもちゆる期會がなく突然山中にて熊に出會ふ時は。先づ兩手をひろげて熊に向ひヤツと云ふて擁擁ふ。すると熊が怒を發して兩拳を堅く握り締め宛かも人間の如くに直立す。其直立して兩拳を握り締むる刹那電光一閃。熊の腹中に飛び込み要意のマキリ(小刀)を以て熊の咽喉より腹へかけ一突に切斷して之を倒すのである。其早業人間をして驚愕せしむと云ふ。

或年のことであるが例の如く五六人隊をなして雪中熊狩を催せり。所が先頭のアイヌが油断して山中を通りかゝりしに傍の大木の影より一匹の巨熊が飛び出して。アイヌの右腕を咬碎きたりしに。不意に驚きて倒るゝ處を飛びかゝり目から右頬にかけて頭蓋骨の半分を剝ぎ取りけるを見て。伴のアイヌ大に怒り此熊を撃殺して。其剝ぎ取られたる頭蓋肉を取つて。之れを剝がれて倒れ居る所のアイヌの顔に接着し其上を樺の皮を以て繃帯を爲し。又右腕をも右と同じ手術を施して。之を擔ぎ歸りて静養せり。然る所が纔かに一宿を経て自から杯を舉げて盛に酒を飲み居たる元氣には喫驚せり。

大江山酒呑童子は其首を切ても直に接着出来し如うに聞くが。斯は滿更拵へた昔噺とのみも云へぬ。北海道のアイヌは往々斯如うなことがある。

北見國常呂村にも此トウロのアイヌと同様熊のために顔半面を剝がれたものが居るが斯アイヌは顔面の肉を熊に持去られし爲め接着出来ず今現に半顔にて生存し居れり。

アイヌの議論

アイヌの記憶に強きことは今更云々するに及ばぬが。ユウカル。タブカラ。等は幾十章となく一言半句も違へずに朗々と唄ふ。又時に議論を闘すことがあつて。若し此議論に勝を得ば一家の寶物を獲ることができる。シヤモにて此議論に勝ち數多の財寶を貰ひ受けたるものが居る。

予が日高國下下方町に滞在中偶一人のアイヌが來りて。アイヌ語を以て此議論をなせり

其大意は

クコンニシバ。テエータカネ。フレコカネエカシヲカー。ヲマイタツカラ。
ウタアークレター。チコシレバー。タネネツキ。カネアナク。ウニイキシア
チノー。エーケウムカ。イコヨナラー。アキヤヤツネー。エツケントムカー。
エラヤクニ。ウネワクシコー。ウラツチタラ。クエアレケ。(略之)

此議論の意は。祖先からの事を子孫の代に到りて。之を解決すと云ふ意であ

ると。

千島樺捉島土人風習 (一)

前樺捉島紗那支廳員 田村忠明氏寄(會員)

千島樺捉島に於ける舊土人の古來襲踏し來りし風習を調査するに。概ね左の如し而して今便宜の爲め項を分け之を序列せん。

△一 婚姻 家族 相續

△一夫多妻。會長は貧富の度に應じて妻及び妾數人を置く。正妻は常に夫の家に住し。妾は別居して各其生業を營む。然れども夫家有事の際は。妻妾相和して其事に當り毫も嫉妬の色を現はさず。途中偶々相遇ふときは。握手の禮を施し其親むこと骨肉の如きなりしが。爾來時世の進歩に従ひ。會長の稱廢せらるゝと共に一夫一婦の制となれり。

△一夫一婦。平土人は從來より一夫一婦にして。夫婦の情頗る濃にて。妻たるものは貞淑にして。常に漁獵樵百般の事業好んで其務に服し。夫を扶養する

を以て婦人唯一の名譽となせり。

△結婚年齢。男は二十三四歳。女は二十歳前後に至り。系統の親族より娶るを例とせり。蓋し系統の絶滅せんことを憂ふるに在るものゝ如し。

△家族。家庭。族制。常に一家團樂し居るも。長子先づ娶らんとすれば。之が爲めに居宅を新築して生計を異にす。二子三子各之に倣ふ。

△家長權。一般普通の戸主と同一なり。

△相續權。之又長男にあり。然ども父死去の後に於て嗣ぐの例なるが如し。

△二 住居

平常住居する家屋の建築法は。先づ土を穿ちて柱を立て長方形に構へ。屋根は三角形となし。屋根及び四壁は草を以て之を蔽ひ。木又は竹を以て結束す。所謂堀立小屋なり。入口は長廊下の一條の道を設く。是又草を以て掩ひ風雪の侵入を防ぐに便す。而して屋上三角形の入口に面したる断面の一方に窓を設け排烟に便する外。光線を導き兼て空氣流通の用に供せり。而して爐は家の土間に接したる處に設け他の一方を缺けり。居室寢室を區別し。土上に板を双べ

若くは枯草を敷きて其上にキノ蕨を敷けり。(以下次卷)

日高國平取村アイヌ風俗の一斑

日高國平取村はアイヌ種族創業の地と稱せられ。彼等の祖先とも云ふ偉人「ヤイオイナクル」と云へるものが此處に住居せりと云ふ。斯く古るき歴史を有する平取が現今如何なる風俗習慣を有せるか。茲に聞がまに、其一斑を記述せん。太古の平取は知らず。現今アイヌの家屋は住宅と倉庫の二棟を有するが例なり。而して平取市街及び其附近の村落に至らば。大概板屋に床を設け硝子窓を用ひ居れりと雖も。山間の部落は猶昔時の如く依然矮小なる萱葺小屋に住居せり。此山中未開部落の住宅は土間に葭籬を敷きて。其上にて飲食及び走臥せり。家屋の構速は所謂堀立小屋にて。先づ土を堀て柱を立て。然る後屋根を地上にて組立之を件の柱の上にのせ其上を萱にて葺くのである。木と木を組み合するには。木の織緯又は葡萄蔓を以て結び合せ。曾て釘を用ゆることなし。(以下次卷)

誌外雜錄

本誌第一卷各地新聞紙の批評

東京朝日新聞 アイヌの風俗習慣ガタンクト人種と同一て又彼等の祖先セツタは佛教にて所説の光音天刹帝利と符合すること其他西洋にて説く所の世界創造者チエベラ神が太陽の子なりと云へると同じくアイヌのチエブ即ち太陽祖先説とも一致することを委しく考設せり。

東京中外商業新報 アイヌが天狗に酷似したる諸點を臚列したる者にて。所謂天狗(タンクト)は世界切初の人類にして妖怪變化にあらず。今其係を蝦夷のアイヌに認むることを得となせり。なか／＼に興味ある研究なり。

報知新聞 アイヌとタンクト人種即天狗と甚だしく類似して居ると云ふて。其に就て研究せる自説である。

北海タイムス アイヌを天狗と見たる動機。天狗とアイヌ類似の點。アイヌのセツタ祖先説。コロボツクル説。地名上より見たる天狗の事蹟。アイヌと仙人

同一の點。太古世界共通の神符。北海通には何故道祖神なきか。義經辨慶とア
イヌ。天狗に關する古人の説。等の各章何れも著者一流の見識を見るべし。
以下略之

樋口銅牛氏の書翰

天狗の研究面白く拜見仕候今少し貴下に國語の智識あらしめてほしく候(中略)
タンクトを以て上古民族と斷定する貴下の御意見には大賛成に候漢字を始めて
製せりといふ蒼頡の如きも恐らくタンクトの音譯字なるべし(中略)蒼頡四目若し
くは蒼頡文字を製したるため鬼夜々哭し天粟を降らせりと云ふ傳説の如き儘に
そのタンクトなることを證明せるものと存候 貴下の事業の大成を祈る 敬具

四月二日

樋口 勇 夫

佐々木 船山 様

座 右

大正二年三月六日印刷

大正二年三月九日發行

蝦夷天狗研究卷二奥附

天狗研究会
員外ニハ 正價金三十錢

東京市日本橋區箔屋町十四番地丸山舍方

著者兼 發行 者 兼 佐々木 船山

東京市日本橋區箔屋町十四番地

刷印者 竹 澤 章

東京市日本橋區箔屋町十五番地

印刷所 丸山 舍 印刷 部

東京市日本橋區箔屋町十四番地

賣捌所 丸山 舍 書籍 部

電話本局二〇八五番
振替口座(東京)五八九二番

著作
權 有 所

會 告

北海道土人アイヌは世界最古の人類乃ち婆羅門支那の仙人日本の天狗に酷似せるのみならず。切初の習慣を傳承し居れるを確信する者なり。因て斯會を設け以て其俾の萬分の一をも研究せんと欲する所なり。篤志の士希くば加勢あらんことを懇望す。

會 規

- 一本會は蝦夷人種を研究するを以て本旨と爲す。
- 一本會は五年若しくは十年間を以て研究期間と爲し。毎年一次研究の次第を印刷物となして會員に配付す。
- 一本會會員は特別贊助員、普通會員の二種とす。特別贊助員は毎年金三圓宛義捐をなし又學術上の後援を與ふるものとす。普通會員は入會の際入會金一圓を義捐し。爾後毎年金一圓宛を義捐するものとす。(但本會々員には質問に應じて解答す。)
- 一本會は會務探檢乃至編集一切創立者に於て之を處理す。

相 州 箱 根
蘆 之 湯

硫黃溫泉 能効

慢性筋僂麻質斯及び慢性痛風
各種神經痛の僂麻質斯に因するもの
慢性皮膚病各症
子宮及び卵巢の慢性加答兒
其他各症に卓効あり

(電話宮ノ下三番)

國府津驛より湯本迄電車
夫より人力車三時間にて達す

相州箱根蘆ノ湖畔

旅館

和洋兩客歡迎客室新鮮接待頗る懇切

はふや 箱根 ホテル

宍戸吉之輔

蘆ノ湖の倒富士を見ざるものは未だ天下の山水を談ずるに足らず斯絶景を
観んと欲せば來りて一遊あれ

温泉旅館

環翠樓

相州箱根塔之澤

鈴木善左衛門

新築落成

下宿業
營

常盤館

東京市本郷區千駄木町五十八番地

ラヂオムーミン霊泉

諸病に効あり

旅館

落

合

樓

伊豆國田方郡湯ヶ島

足立三敏

客室清潔接待丁寧宿料低廉を旨とす

終

